丹後の古墳時代中・後期の土師器Ⅰ

福島孝行

1．はじめに

丹後地域の古墳時代の須恵器出現以降における土師器の編年はあまり進んでいない。平成10年度の浅後谷南遺跡の調査において、古墳時代中・後期の溝からまとまった量の土師器が出土したことから、これらの位置づけを考えるために丹後の古墳時代中・後期、特に須恵器出現以降の土師器を集め、若干の編年的見通しについて述べておきたい。なお、今回資料を集めるに当たっては、ある程度一括性が高いと考えられる資料を扱った。集落の土器と古墳の土器とは本来分けて検討すべき性格のものであるが、資料の量的な制約のため、今回の検討についてはやむなく一括して取り扱った。また、今回は出土量の比較的多い形式に絞って扱ったので、当該期のすべての形式を網羅した編年表にはなっていない。扱った資料は第１表の通りである。紙幅の関係上、それぞれの遺跡の遺物については触れられないため、各報告書を参照していただきたい。なお、器種名において、～形は特定の地域に分布する形式の影響を受けたもの、～系は前段階(典型布留式)に系譜を求められるもの、～模倣は土師器ではなく、須恵器からの形態の模倣という意味で用いている。

2．各小様式の検討

丹後中期１式(布留新段階併行)

壺　小型丸底土器と、直口壺とを検討する。小型丸底土器には、小振りの偏球形で上半部が直立する体部に大きく開く口縁部を持つ小型丸底鉢、球形胴または偏球形胴に長く外方に広がる口縁部を持つ長口縁小型丸底壺(口縁部高：胴部高＝１：２未満、口径＝胴部最大径)、球形胴に短く外方に広がる口縁部を持つ短口縁小型丸底壺(口縁部高：胴部高＝１：２～３、口径＜胴部最大径)、球形胴に極めて短い口縁部を持つ極短口縁小型丸底壺の４種がある。長口縁小型丸底壺はやや丁寧な作りで、前代の影響を残すＡ類と、粗雑で口縁部が直立気味なＢ類に細分される。小型丸底鉢は典型的布留式の指標となる器種であるが、幾坂遺跡例は既に外面調整のヘラミガキを省略し、ヨコナデとヨコハケで調整している。長口縁小型丸底壺について、奈具岡北１号墳例では偏球形の体部に直線的に外方に伸びる口

第１表　取り扱った遺跡一覧

須恵器型式	遺跡名	所在地	遺構名	一括性	文献
栂地区232号窯型式（布留新段階）	幾坂遺跡	中郡大宮町	ＳＨ10	一括資料（焼失住居床面完形土器群）	肥後・橋本1991
	日置遺跡	宮津市	ＳＸ501	土器溜まり	中嶌1983
	奈具岡北１号墳	竹野郡弥栄町	第１主体部	一括資料（竪穴系墓壙内供献土器群）	河野1997
	浅後谷南遺跡Ａ地区	竹野郡網野町	ＳＤ2013	準一括資料（溝層位資料）	石崎・福島2000
高蔵寺地区73～216号窯型式	鴫谷東１号墳	与謝郡加悦町	墳丘南裾西側・墳頂部	準一括資料 採集品	佐藤1982 和田1987・1989 和田・山本1992
	奈具岡遺跡２次	竹野郡弥栄町	中尾根西斜面	準一括資料	川西1985
	奈具岡遺跡９次	竹野郡弥栄町	ＳＨ005	一括資料（床直土器群）	筒井・楢本1999
	浅後谷南遺跡Ａ地区	竹野郡網野町	ＳＤ2010古段階	準一括資料（溝層位資料）	石崎・福島2000
高蔵寺地区208号窯型式	有熊遺跡	与謝郡加悦町	ＳＢ1・ＳＫ5	一括資料	家根1991
	鴫谷東３号墳	与謝郡加悦町	陸橋部	準一括資料	和田・山本1992
	小池２号墳	中郡大宮町	墳丘上・墓壙内	準一括資料	鈴木・植山1984
高蔵寺地区23号窯型式	浅後谷南遺跡Ａ地区	竹野郡網野町	ＳＤ2010新段階	準一括資料（溝層位資料）	石崎・福島2000
	浅後谷南遺跡Ｂ地区	竹野郡網野町	ＳＤ09	準一括資料（溝層位資料）	石崎・福島2000
	谷内遺跡	中郡大宮町	ＳＨ15	準一括資料（住居内埋土土器群）	細川1988
	平遺跡	竹野郡丹後町	土器溜まり1･2	土器溜まり	河野1997
	小池５号墳	中郡大宮町	墳丘上	準一括資料	鈴木・植山1984
高蔵寺地区47号窯型式	遠所21号墳	竹野郡弥栄町	主体部	一括資料（竪穴系墓壙内供献土器群）	増田・岡崎1992
	アサバラ遺跡	熊野郡久美浜町	ＳＨ02	一括資料（床直土器群）	荒川1989
陶器山地区15号窯型式	浅後谷南遺跡Ａ地区	竹野郡網野町	ＳＨ18	一括資料（床直土器群）	石崎・福島2000
	浅後谷南遺跡Ｂ地区	竹野郡網野町	ＳＤ08下層	準一括資料（溝層位資料）	石崎・福島2000
	アバタ遺跡	中郡大宮町	流路上層	準一括資料（流路層位資料）	肥後1990
	宮の森１号墳	竹野郡弥栄町	第１主体部	一括資料（竪穴系墓壙内供献土器群）	増田・三好1987
高蔵寺地区10号窯型式	浅後谷南遺跡Ｂ地区	竹野郡網野町	ＳＤ08中層	準一括資料（溝層位資料）	石崎・福島2000
	天王山Ａ５号墳	熊野郡久美浜町	主体部	一括資料（竪穴系墓壙内供献土器群）	松尾1997
	天王山Ｂ１号墳	熊野郡久美浜町	主体部	一括資料（竪穴系墓壙内供献土器群）	増田・岡崎1998
	天王山Ｂ２号墳	熊野郡久美浜町	主体部	一括資料（竪穴系墓壙内供献土器群）	増田・岡崎1998
	谷垣１号墳	熊野郡久美浜町	墳頂部	準一括資料	岡崎1998
	離山古墳	竹野郡網野町	開口部	一括資料	浪江ほか1993
高蔵寺地区43号窯型式	浅後谷南遺跡Ｂ地区	竹野郡網野町	ＳＤ08上層	準一括資料（溝層位資料）	石崎・福島2000
	陵神社12号墳	熊野郡久美浜町	横穴式石室	供献土器群	岩崎1991
	入谷西Ａ－１号墳	与謝郡加悦町	玄室内左袖	準一括資料	佐藤1983
	遠所24号墳	竹野郡弥栄町	第2主体部	一括資料（竪穴系墓壙内転用枕）	増田・岡崎1992
高蔵寺地区209号窯型式	竹野遺跡	竹野郡丹後町	ＳＨ19	埋土内土器群	奥村・吉田1987
	裾谷遺跡	中郡大宮町	ＳＨ07	埋土内土器群	筒井1995

縁部が付き、布留式の影響を強く残す形態である。日置遺跡例では口縁部はまだ長いが、体部は球形化を示す。これらの資料は布留式の影響を残しつつも粗雑化が目立ち、小型精製器種としての認識が薄れた時期のものであることが考えられる。直口壺は日置遺跡に口縁端部内面に肥厚の痕跡が認められる。これは布留式の影響を残すものであると考えられる。したがって、この壺を布留系直口壺と呼ぶ。この個体には竹管文が施されるが、全体とし

ては波路古墳などで出土する布留式の直口壺の様相を残している。

高坏　高坏には無稜外反高坏・直口高坏・有稜高坏・大型有稜高坏・短脚椀形高坏が存在する。無稜外反高坏は坏部内外面をハケ調整し、脚柱部外面に縦方向のヘラミガキを施す。脚部は柱状の脚柱部から外反して裾部が長く広がる。坏部内面に放射状のヘラミガキを施すものがある。口縁端部はやや外反し、丸く収めるものと、面をもつものがある。有稜高坏は坏底部と口縁部の境界部に稜はあるものの、丁寧な整形を行い、段はない。脚柱部は柱状で、強く屈曲して長い裾部をもつ。脚柱部外面には縦方向のヘラミガキを施す。大型有稜高坏は坏底部と口縁部の境界部に稜はあるものの、丁寧な整形を行って段を作ってはいない。脚柱部はやや外方に直線的に広がり、明瞭に屈曲して長い裾部を付す。脚柱部外面は縦方向のヘラミガキを施す。低脚椀形高坏の祖形的な器形も存在する。

甕　甕には小型甕、布留式の後継機種となる布留系くの字甕、出現当初から長胴のくの字甕、複合口縁甕が存在する。小型甕は丁寧な作りで、口径が胴部最大径に近いＡ類と、粗雑な作りで、口径が胴部最大径より小さいＢ類が存在する。甕類は、外面調整はタテハケを基調とするが、肩部にヨコハケもしくはヨコハケを意識したナナメハケを施すものもある。内面調整は底部から中位までは縦方向もしくは斜め方向のヘラケズリを行い、上位をナデるものがあるが、屈曲部までヘラケズリを施すものも残る。小型甕の中にはハケ調整のものもある。布留系くの字甕は体部は球形で、口縁部を内弯させ、口縁端部内面を強くなでて肥厚するかのように見せるものがある。

こうした特徴からこれらの土器群を典型的な布留式に併行する段階から分離して布留式新段階併行期としたい。

丹後中期２式(阪南古窯址群高蔵寺地区第73～216号窯型式併行＝ＴＫ73～ＴＫ216型式併行)

壺　壺には長口縁小型丸底壺・短口縁小型丸底壺・極短口縁小型丸底壺・須恵器模倣直口壺が存在する。短口縁小型丸底壺は内面調整を指頭によるナデ上げに変更しており、前代のヘラケズリを放棄している。これと同じ調整をするものに奈具岡遺跡中尾根西斜面土器群の長口縁小型丸底壺があり、これらは同時期の所産であると考えられる。また、鴨谷東１号墳出土の高坏の類似から浅後谷南遺跡Ａ地区ＳＤ2010古段階の土器群もこの時期と考えられるが、この土器群には極短口縁小型丸底壺が含まれる。今回、須恵器模倣直口壺と呼ぶものは偏球形の胴部に直立する口縁部を付し、口縁部の中程に突帯を巡らす。体部外面下半はヨコハケの後タテハケを施し、肩部にはヨコハケを施す。内面は屈曲部までヘラケズリを施す。この器種は既に谷内遺跡の報告で細川康晴氏によって須恵器直口壺の模倣であるという指摘がなされている[注1]。鴨谷東１号墳例はこれに先行するものであり、当該

期にも類似した形態の須恵器直口壺が阪南古窯址群で見られる。したがって形態の類似からこれも須恵器模倣の直口壺であると判断される。

高坏　高坏には無稜外反高坏・直口高坏・有稜高坏・大型有稜高坏が存在する。無稜外反高坏は脚部の屈曲が明瞭になり、脚柱部外面に縦方向のヘラミガキを施さない個体もある。坏底部を前代では内傾させて付していたが、水平に付すようになり有稜大型高坏に見られる坏底部の接着法と同様になる。小型無稜直口高坏は前代から変化しない。奈具岡遺跡９次調査ＳＨ005は高坏の形態･技法上の特徴と甕の口縁端部内面を肥厚する傾向から当該期に当たる可能性が高い。この遺構の有稜高坏は坏底部を水平に付すが、坏底部端を丁寧に整形し、段が付かない。大型有稜口縁高坏は坏底部と口縁部の境界に明瞭な段が生じている。これは水平に付した坏底部の端部上面に口縁部を接着し、坏底部端を整形しないことによって生じる段である。これを「擬口縁手法」と名付ける。口縁部は僅かに外反している。

甕　甕は奈具岡遺跡９次ＳＨ005で布留系くの字甕とくの字甕がある。前者は口縁部が内弯しなくなり、後者は基本的には前小様式から変化しない。小型甕と複合口縁甕の資料を欠くが、次小様式にも残るため、この小様式に存在する可能性は高い。

この小様式の特徴は高坏の省力化の過程で擬口縁手法が確立することである。この手法は大型高坏に限られており、他の高坏にはまだ敷衍されていない。この小様式の土器群は直接的には須恵器を伴わない。奈具岡遺跡９次ＳＨ005の埋土にＴＫ208型式併行の須恵器が混入しており、床面の土器群がそれ以前に比定されること、直口壺の形態がＴＫ73～216型式併行の直口壺に類似することなどからＴＫ73～216型式の須恵器に併行する可能性が高い。

丹後中期３式（阪南古窯址群高蔵寺地区第208号窯型式併行＝ＴＫ208型式併行）

壺　壺には短口縁小型丸底壺、須恵器模倣直口壺をさらに模倣した直口壺として、偏球形胴直口壺、球形胴直口壺があり、後２者は以後の丹後地域の直口壺の主流を占める。須恵器模倣直口壺は出土例がないが、次小様式に存在するため当小様式に存在する可能性は高い。直口壺は内面にヘラケズリを用いる例が減り、ハケ調整などを用いる。小型丸底土器は粗雑化が一層進行する。

高坏　高坏は無稜外反高坏が有稜化し、有稜外反高坏に変化する。直口高坏は失われる。有稜高坏は擬口縁手法が導入される。脚柱部の外面調整は前小様式を引き継ぎ、縦方向のハケを施した後、ヨコナデを施す。脚裾部の屈曲は最大になり、裾部内面全体が接地する。大型高坏は口縁部が深くなり、脚柱部がやや大きく開く傾向にある。また、この小様式には脚裾部屈曲部付近に見られた円形スカシが見られなくなる。低脚椀形高坏は確実な例が

存在するが、出土数は多くない。

甕　甕は小型甕・布留系くの字甕・くの字甕・複合口縁甕が存在する。内外面調整は大きく変化しないが、口縁部内面にヨコハケを施すもの、肩部内面にナデを施すものが増える傾向にある。

坏・椀　この小様式から坏・椀が出現する。底部が比較的平坦なものを坏と呼び、丸いものを椀と呼ぶが、その境界は曖昧で、製作技法も全く同じである。ただし、浅手のものは必然的に底部が平坦になり、深手のものには丸底のものが多い。したがって今回は便宜的に径高指数(器高／最大径×100)がおよそ36前後、またはそれ以下のものは坏と呼ぶことにした。また、径高指数50以上で、口縁部が内傾するものを盌と呼ぶこととし、それ以外は椀と呼ぶこととする。椀のうち、径高指数40前後のものを浅手、およそ42前後を中手、およそ46前後を深手に分類する。この小様式には坏・浅手椀・中手椀が存在する。製作は内面をハケ調整した後全面をヨコナデし、底部外面を横方向にヘラケズリで仕上げる。全面にヨコナデを施した後に底部外面を横方向ヘラケズリするという手法は、須恵器の坏身と同じ技法によるものであると考えられる。また、この小様式に浅いものが多いことは共伴する須恵器がＴＫ208型式であり、この型式の蓋坏の形態が平坦であることとよく符合する。したがって坏・椀は須恵器を知る者が、供給不足を補うために生産した器形であると考えられる。

この小様式の土器群はＴＫ208型式併行の須恵器を伴う。この小様式の特徴は短脚椀形高坏を除く高坏に擬口縁手法が導入され、有稜高坏が主体を占めるようになることと、坏・椀が出現することである。この小様式に中期後半～後期にかけての主要な器種が出揃い、丹後において布留式に替わる新しい規範が完成するものと考えられる。

丹後中期４式(阪南古窯址群高蔵寺地区第23号窯型式併行＝ＴＫ23型式併行)

壺　小型丸底土器には長口縁小型丸底壺・短口縁小型丸底壺・直立口縁小型丸底壺(21)・須恵器模倣小型丸底壺が存在する。どの器種も粗雑化が極限まで進行する。この小様式から出現する須恵器模倣小型丸底壺は肩が張って、尖底を指向する胴部に直線的に上外方に広がる口縁部を付す。そして胴部最大径付近に円孔を穿つものがある。直口壺には須恵器模倣直口壺・偏球形胴直口壺・球形胴直口壺が存在する。前者は口縁部の突帯が退化し、沈線を巡らせるようになる。後者は頸部の径がやや広がる傾向にある。

高坏　有稜外反高坏・有稜高坏・大型有稜高坏・有稜椀形高坏・椀形高坏・短脚椀形高坏が存在する。有稜外反高坏は口縁端部のみを外反させるようになる。脚柱部の縦方向ヘラミガキは形骸化する。有稜高坏は坏部が浅手のもの(51)や脚部がラッパ状に開くもの(50)など形式分化が進む。畿内地域で高坏の主たる器種である椀形高坏が少量搬入されるが定

着せず、変容を受け、在地化する。この小様式の長脚の高坏は脚裾部、脚柱部共にやや短くなる。また坏底部と脚柱部の接着部には非常に強い指頭圧痕が明瞭に残る。(注2) 短脚椀形高坏は脚部をやや高く作るものと、低い脚部のものがある。

甕　甕には前小様式の器種に加えて口縁が外反する外反甕が加わり、複合口縁甕が共伴する最後の小様式でもある。

坏・椀　坏は数量が減少し、中手の椀が大小の法量分化をする。

この小様式にはＴＫ23型式併行の須恵器を伴う。この小様式の指標として目を引くのは高坏の粗雑化と器高の低下、有稜高坏の器種の増加である。前小様式に成立した規範が早くも崩壊し始めている状況が読みとれる。

丹後後期１式(阪南古窯址群高蔵寺地区第47号窯型式併行＝ＴＫ47型式併行)

壺　球形胴直口壺から球形胴長口縁直口壺が分化する。これ以外の器形に関しては出土例がないため不明である。

高坏　有稜外反高坏の脚部がアサバラ遺跡で出土しているが、その他は不明である。

この小様式は須恵器を共伴する資料が少なく、検討することは困難である。しかし、大宮町新宮遺跡ＳＨ01及びＳＨ02の資料(注3)は当小様式の資料である可能性が高い。両竪穴住居から出土した土器群は丹後中期４式と丹後後期２式との中間的な様相を示している。

丹後後期２式(阪南古窯址群陶器山地区第15号窯型式併行＝ＴＫ15型式併行)

壺　長口縁小型丸底壺・直立口縁小型丸底壺・極短口縁小型丸底壺・偏球形胴直口壺・球形胴直口壺・細頸直口壺(31)などが存在する。細頸直口壺は前代の球形胴長口縁直口壺の口縁部を矮小化した形態をとる。小型丸底土器の調整はハケやナデを行うにすぎない。したがって肩部内面に輪積みした粘土紐の痕跡が明瞭に残る。直口壺の内面にもヘラケズリは行われず、ハケまたはナデが行われる。

高坏　有稜外反高坏の後継器種はこの小様式には存在しない。有稜高坏のバリエーションと、短脚化し中実の脚柱部をもつ短脚有稜高坏・短脚椀形高坏が存在し、短脚椀形高坏は器高が高いものと低いものとがある。有稜高坏には脚柱部の中央が膨らむ形態(59)が多くなり、短脚化が進行する。

甕　小型甕は前様式からあまり変化がない。布留系くの字甕は布留式の特徴であった口縁端部内面の肥厚の痕跡を失い、単純なくの字口縁に肩の張る甕となる。しかし依然として内面調整は横方向のヘラケズリが用いられている。外反甕は肩の張りがさらに失われる。

坏・椀　坏が無くなり、浅手の椀も減少する。また、径高指数が50を越え、口縁が内弯する盌と呼ぶべき形態のものが出現する。内外面調整の省力化が始まり、外面体部下半のヘラケズリを省略したり、内面二次調整のヨコナデを省略して、一次調整のハケメが残る

ものも出現するが、そうした個体は多くない。

丹後後期3式(阪南古窯址群高蔵寺地区第10号窯型式併行＝ＴＫ10型式併行)

壺　小型丸底土器は見られない。ただし、次の小様式に直立口縁小型丸底壺が残存するので、この小様式にも存在する可能性はある。直口壺は偏球形胴直口壺だけが知られている。これは口縁部を長く拡張し、外反させるものである。

高坏　高坏は短脚椀形高坏を除いて全体的に数量を減じ、器種も有稜高坏・大型有稜高坏の2者のみとなる。大型有稜高坏は坏部の内外面調整が省略化の極限を迎え、一次調整のハケメをほとんど消さず、ヨコナデ行為は形骸化している。大型有稜高坏には口縁が外反するものと、内弯するものとがある。短脚椀形高坏は前様式と大きな違いはない。

甕　小型甕は変化がない。くの字甕の胴部の形態は不明である。

坏・椀　この小様式から新たに深手の椀が出現する。それ以外は前小様式と同様である。

丹後後期4式(阪南古窯址群高蔵寺地区第43号窯型式併行＝ＴＫ43型式併行)

壺　最後の小型丸底土器である、直立口縁小型丸底壺が浅後谷南遺跡から出土している。

高坏　長脚の高坏は有稜高坏の脚部と思われるものが浅後谷南遺跡ＳＤ08で出土している他は確実な例はない。加悦町入谷西Ａ－１号墳から出土した椀形高坏(68)はその形態や、脚柱部と坏部下半外面を縦方向の指ナデ調整するなど在来の高坏に無い特徴を有しており、綾部市栗ヶ丘古墳群(注4)など、由良川流域の古墳出土の高坏に類例を求めうる。短脚椀形高坏は小型化したものが僅かに残存する。

甕　くの字甕の口縁部が出土しているが、胴部の状況は不明である。

坏・椀　この小様式は調整の省略が顕著になる小様式である。内外面調整ともハケ調整が見えるものが主体となる。また、この小様式から少数ながら坏が再び出現する。

この小様式から坏・椀と甕以外の土師器は激減し、古墳の横穴式石室の副葬品に若干見られる程度になる。

丹後後期5式(阪南古窯址群高蔵寺地区第209号窯型式併行＝ＴＫ209型式併行)

この小様式には壺・高坏は既に土師器の組成から失われていると考えられる。

甕　小型甕・くの字口縁甕・外反甕が存在する。内面調整はハケメが多くなる。

坏・椀　やや大型の浅手椀と中手椀が存在する。横穴式石室の副葬品としてみられることが多い。坏も存在すると思われるが、出土例が複数回の追葬がある横穴式石室例であるため、図示しなかった。また、古墳時代後期に特徴的な器種組成のほとんどを失っているため、この小様式をもって古墳時代の土師器は終焉を迎えたと考え、次の小様式は設定しない。

3．結語

以上、丹後地域における古墳時代中・後期の土師器を概観してきたが、資料不足のため、網羅的な編年や、居住域と墳墓を分離した編年には遠く及ばなかった。小稿は竪穴住居や木棺直葬墳などから土師器しか出土しなかった場合の、時期の見当をつける目安と考えていただきたい。今回果たせなかった課題については別稿を予定している。

（ふくしま・たかゆき＝当センター調査第2課調査第1係調査員）

注1　細川康晴「谷内遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第28冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1988

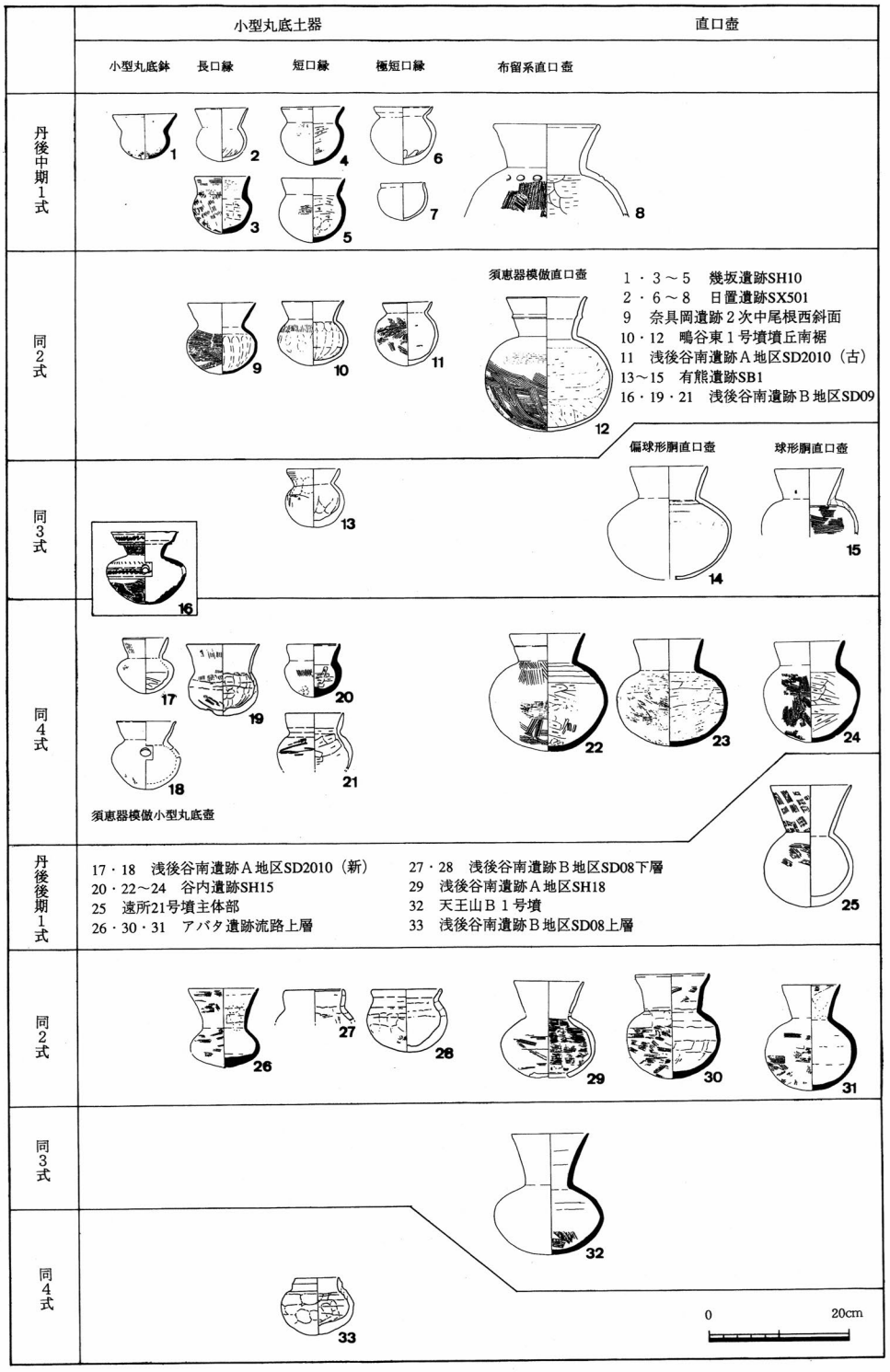
注2　(財)大阪市文化財協会　辻　美紀氏の御教示による。

注3　橋本勝行『新宮遺跡発掘調査概報』(大宮町教育委員会)　1999

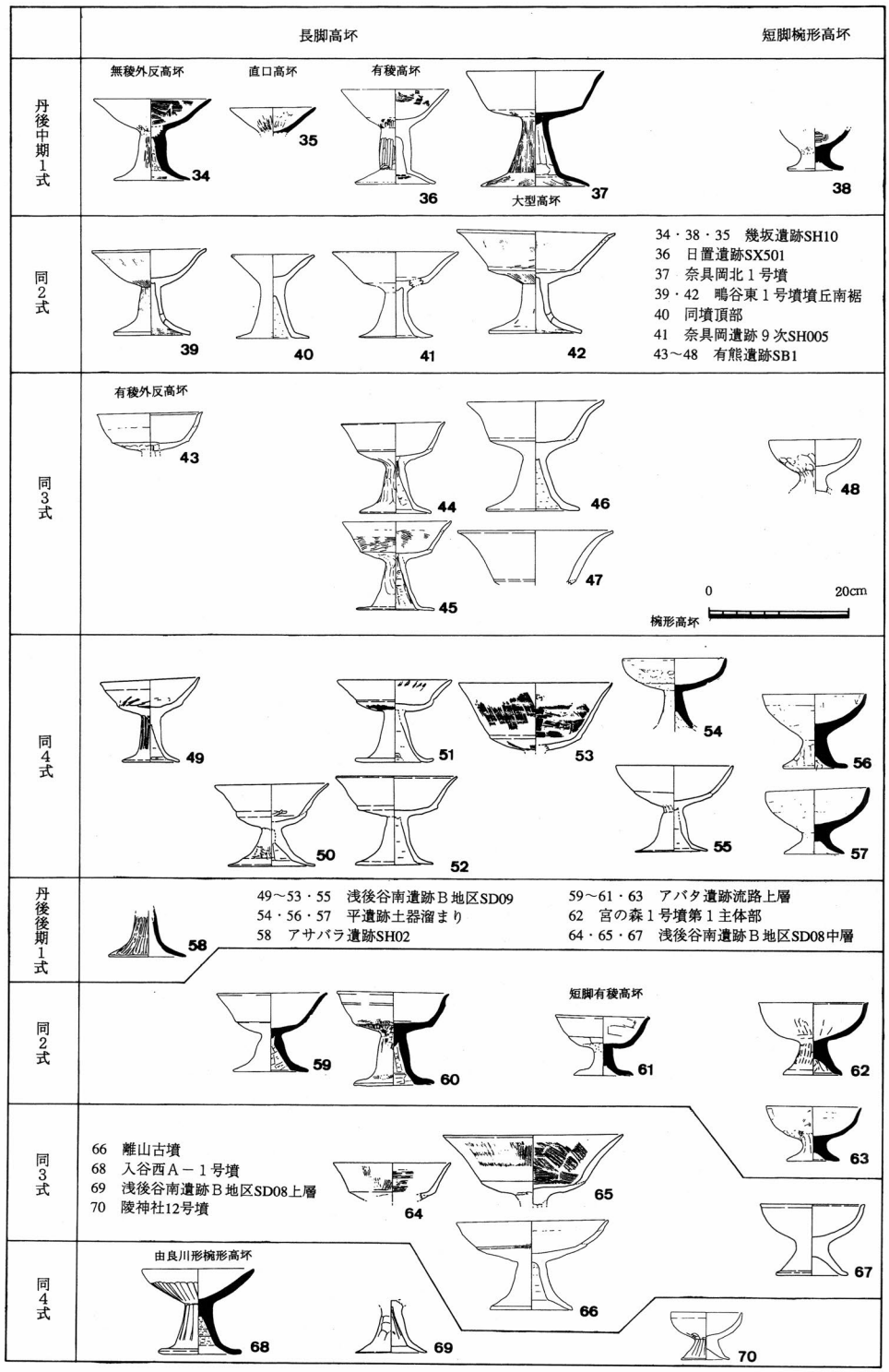
注4　引原茂治ほか『京都府遺跡調査報告書』第13冊((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1989

参考文献(当調査研究センターの刊行物については、「当センター」と略記した)

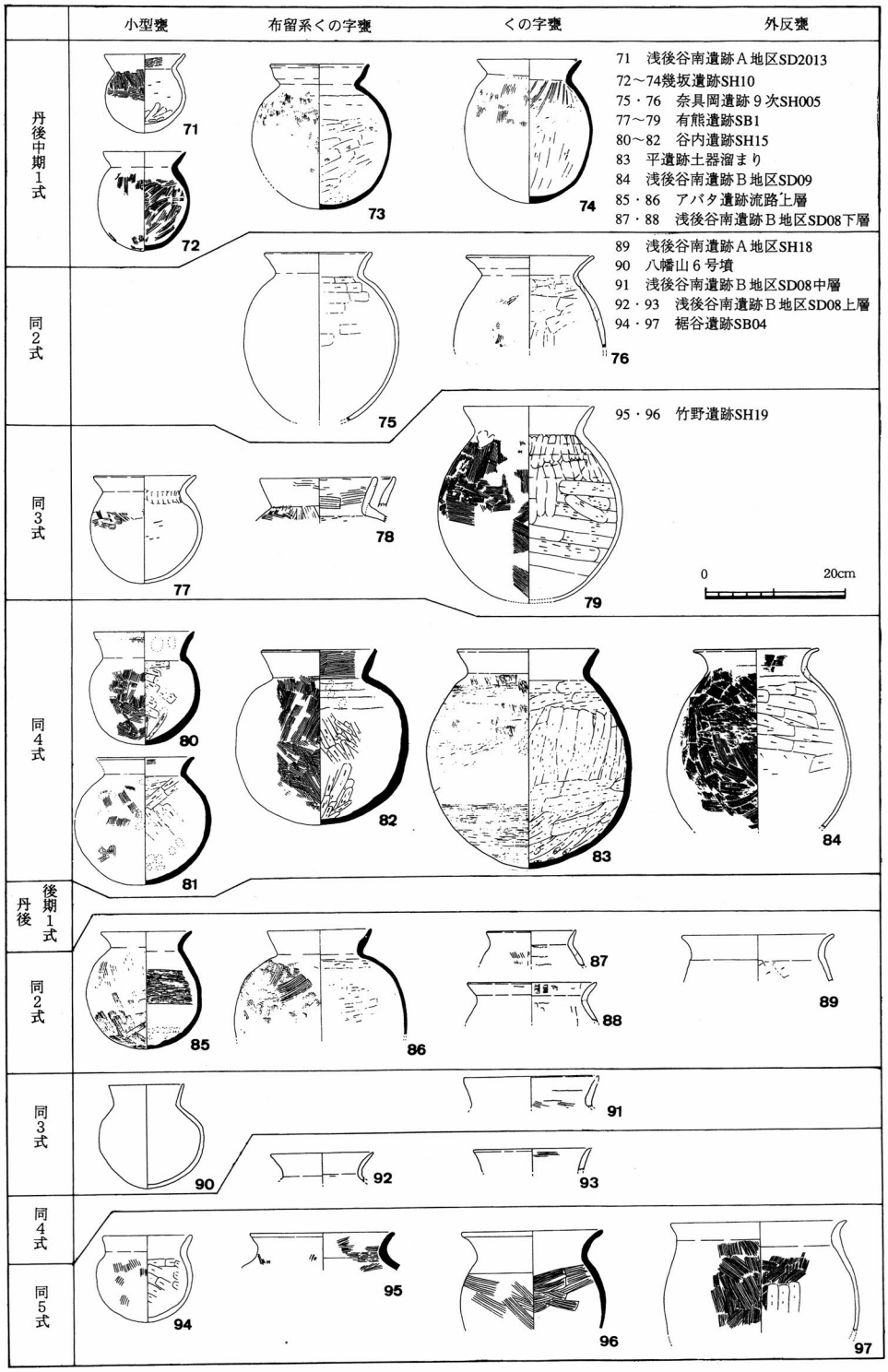
荒川　史　1989　「アサバラ遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第34冊　当センター)
石崎善久・福島孝行　2000　「浅後谷南遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第93冊　当センター)
岩崎浩一　1991　『陵神社12号墳』(久美浜町教育委員会)
岡崎研一　1998　「谷垣古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第83冊　当センター)
奥村清一郎・吉田　誠　1987　『竹野遺跡』(丹後町教育委員会)
川西弘幸　1985　『奈具岡遺跡発掘調査報告書』((財)古代學協會)
河野一隆　1997「奈具岡北古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第76冊　当センター)
　　1997「平遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第79冊　当センター)
佐藤晃一　1982　「加悦町鳴谷東1号墳出土の土師器」(『太邇波考古』創刊号　両丹技師の会)
佐藤晃一　1983　『入谷西A－1号墳』(加悦町教育委員会)
鈴木忠司・植山　茂ほか　1984『小池古墳群』(大宮町教育委員会　(財)古代學協會・平安博物館)
筒井崇史　1995　「裾谷横穴・遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第65冊　当センター)
筒井崇史・楢本順子　1999　「奈具岡遺跡9次」(『京都府遺跡調査概報』第87冊　当センター)
中嶌陽太郎　1983　『日置遺跡発掘調査概要』(宮津市教育委員会)
浪江庸二ほか　1993　『離山古墳・離湖古墳発掘調査概要』(網野町教育委員会)
肥後弘幸　1990　「アバタ遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報』　京都府教育委員会)
肥後弘幸・橋本俊介　1991　「幾坂遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報』　京都府教育委員会)
増田孝彦・鵜島三寿　1987　「宮の森古墳群」(　『京都府遺跡調査概報』第24冊　当センター)
増田孝彦・岡崎研一　1992　「遠所古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第50冊　当センター)
増田孝彦・岡崎研一　1998　「天王山古墳群・別荘古墳群・別荘遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第83冊　当センター)
増田孝彦・三好博喜　1987　「宮の森古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊　当センター)


小型丸底土器
直口壺
小型丸底鉢
長口縁
短口縁
極短口縁
布留系直口壺
丹後中期1式
同2式
須恵器模倣直口壺
1・3～5　幾坂遺跡SH10
2・6～8　日置遺跡SX501
9　奈具岡遺跡2次中尾根西斜面
10・12　鳴谷東1号墳墳丘南裾
11　浅後谷南遺跡A地区SD2010（古）
13～15　有熊遺跡SB1
16・19・21　浅後谷南遺跡B地区SD09
偏球形胴直口壺
球形胴直口壺
同3式
同4式
須恵器模倣小型丸底壺
丹後後期1式
17・18　浅後谷南遺跡A地区SD2010（新）
20・22～24　谷内遺跡SH15
25　遠所21号墳主体部
26・30・31　アバタ遺跡流路上層
27・28　浅後谷南遺跡B地区SD08下層
29　浅後谷南遺跡A地区SH18
32　天王山B1号墳
33　浅後谷南遺跡B地区SD08上層
同2式
同3式
同4式
0
20cm

第1図　壺形土器変遷図

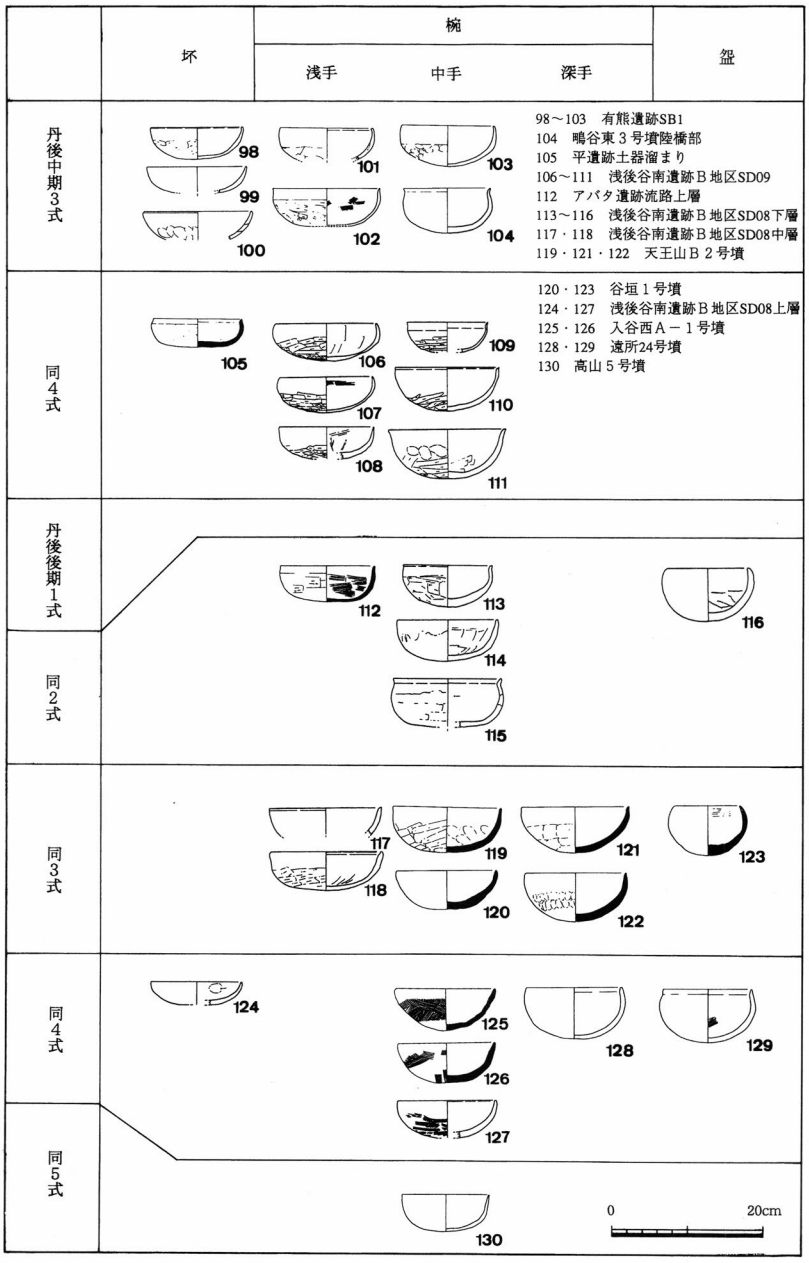


第２図　高坏形土器変遷図


小型甕
布留系くの字甕
くの字甕
外反甕
丹後中期1式
同2式
同3式
同4式
丹後 後期1式
同2式
同3式
同4式
同5式
71 浅後谷南遺跡A地区SD2013
72～74幾坂遺跡SH10
75・76 奈具岡遺跡9次SH005
77～79 有熊遺跡SB1
80～82 谷内遺跡SH15
83 平遺跡土器溜まり
84 浅後谷南遺跡B地区SD09
85・86 アバタ遺跡流路上層
87・88 浅後谷南遺跡B地区SD08下層
89 浅後谷南遺跡A地区SH18
90 八幡山6号墳
91 浅後谷南遺跡B地区SD08中層
92・93 浅後谷南遺跡B地区SD08上層
94・97 裾谷遺跡SB04
95・96 竹野遺跡SH19
0
20cm

第3図　甕形土器変遷図

松尾史子　1997　「天王山Ａ５号墳」(『埋蔵文化財発掘調査概報』　京都府教育委員会)
家根祥多　1991　『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』第３冊(立命館大学文学部)
和田晴吾ほか　1987　『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』第１冊(立命館大学文学部)
　　1989　『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』第２冊(立命館大学文学部)
和田晴吾・山本雅和　1992　『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』第４冊(立命館大学文学部)



第４図　坏・椀形土器変遷図